
Sicario ~ 漆黒の殺し屋 ~

龍の鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sicario ～漆黒の殺し屋～

【Nコード】

N50820

【作者名】

龍の鈴

【あらすじ】

異世界を舞台に繰り広げられるファンタジー。

主人公にそぐわない、残虐さ冷酷さを持つ裕也。

この世界で何を求め、何を希望に生きるのか？

そして、その先にあるものとは？

人間らしさを失なった少年が徐々に心を取り戻してゆく。

現代武器、魔法、幻獣など様々なものが交差する異世界ファンタジ
ー開幕です。

グロテスクな表現など含まれています。苦手な方は注意してくだ
さい。

Episode 0 (前書き)

もう一つ作品を抱えている身ではありますが、構想中に前から書きたかったイメージが膨らんできたので書き始めてしまいました。

今回は、コメディーさよりシリアス部分が増えると思います。
物語前半はかなり暗い雰囲気が始まります。

では、お楽しみ下さい。

Episode 0

「この状況で、おまえ一人で何が出来る??」

床に伏せている一人の少年を囲む如何にもマフィアと呼ばれる集団。人数は軽く20人を超えている。そして各々の手には銃が握られていた。

握られた銃の種類はバラバラだがグリップの部分に蛇が交差した紋章が描かれている。

満月の光がこの部屋に差し込みその様子を映し出す。

男の顔、そしてこの部屋の角に転がっている2つの死体。

「お前の父親を探すのに苦労したぞ?? 周りの奴を何人巻き込んだか解らないしな。」

伏せている少年に向けリーダー格の男が静かに語りながら腰を後ろに回しながら銃を取り出す。その手に握られているのは『砂漠の鷲』則ち、『デザートイーグル』だ。

銀色の銃身には蛇が彫り込まれており、暗闇の中で不気味に輝いている。

「さて、ロケットを渡してもらおうか?」

「・・・」

「終わりの時間だ。」

マフィアの言葉と共に銃が轟音と共に弾を撃ち出したた。

咄嗟に俺は、ベッドから飛び起きた。

「また、あの夢か…。」

忘れようにも忘れられないあの日の出来事。

俺が人生いう名のレールから脱線し、下へ下へと落ち始めた日…。

ベッドの脇に置かれた携帯を開き時刻を確認する。

時刻は午前4時。

3月の終わりということもあり、まだまだ冷え込む時期だ。

カーテンを開くと一流ホテルということもあり、東京タワーに反射

する朝日という贅沢な景色が一望できる巨大な窓。

一般人なら感嘆の声をあげるところだが生憎、そのような感情は浮かばない。

ベッドの下に置いてあるギターケースを取りだしファスナーを開ける。

中には黒塗りの部品が入っていた。

馴れた手つきでそれを取り出し、一品一品組み立ててゆく。

3分程で『SR-25』の組み立てが終わり、バルコニーに銃を置きながら自分も寝そべる。

脇に置かれた計測器で風速、距離を確認する。

北風、風速6 m / s

距離1242 m

スコープのダイヤルをカチツカチツカチツ…と調整する。

銃口をバルコニーの手すりの間からから首都高に向ける。

スコープを覗きながら俺はその瞬間を待つ。

真つ赤な一台の車が朝の首都高を疾走して行く。

「Ferrari F40」

跳ね馬と称され、皆が憧れ車の一種だろう。

サングラスをかけ、その車に乗っている一人の男がいた。坂口達也、それがこの男の名だ。

「いやあ。昨日は儲けたな。あのバカ女、早速要求してきやがった。これだから薬中は。キャハハハ！」

車内で一人笑い声をあげながら男は車を走らせる。

「来たか。」

ビルの間からチラツと見えた赤色の車体を確認し、トリガーに指をかける。

トリガーを引き絞り、弾が発射される。

パシユツ。

カランツ、カランツ…。

葉莢が地面に落ちるとほぼ同時に弾はフェラーリのタイヤに命中し、車体は一瞬バランスを崩したまま、カーブに差し掛かり壁に突っ込んだ。

時速150kmオーバーで壁に突っ込むのだからたまったものではないだろう…。

炎上し数千万が塵になっていく様子はなんとも言えないが…。

その様子を確認し、銃を再度ばらしてギターケースにしまった。

携帯でどこかに連絡し、ギターケースをベッドの脇に立て掛ける。

朝9時。

予定通りにチエックアウトし、俺はギターケースを担ぎながらホテルを後にした。

Episode 0 (後書き)

いかがでしたか？
とりあえずプロローグ的なものです。

銃器紹介。

この物語では銃器が結構出てくるのであとがきの場を借り簡単に紹介して行きます。

・SR - 25

7.62x51mm弾を使用する、スナイパーライフル。装弾数はマガジンによって異なりますが作品では20発のものを使用しています。本作品のものはサイレンサーを取り付けたモデルになります。

・Desert Eagle

いわずと知れた有名なハンドガンです。拳銃用弾薬としては最大の50AE弾を使用するものが有名です。本作品では一応50AEとして登場していますが、使い勝手が悪いので主人公はあまり使用しません。

Episode 1 (前書き)

さて、プロローグの延長線に当たる話です。

この作品は作者の妄想やらなにやらが、かなり含まれていきそうです。。

では、どうぞ^^

Episode 1

今、俺はカンパニーの入り口にいる。

カンパニーとは俺の雇い主というか、共犯者というか…まあ、俺に殺しの技術と機会を提供してくれた人が作った会社だ。表向きはIT企業だが、裏の顔は正義の味方っというか復習代行人だ。

カンパニーの建物は地上48階建てとなっているがそれは表向き。俺の用があるのは50階だ。

エレベーターに乗り、鍵口に鍵を差し込む。
5階・10階・15階・20階のボタンを押した後、鍵を捻る。
するとエレベーターはこの階にも止まらず48階を通り過ぎ50階に向かう。

キーンコーン。
扉が開くと、社長室のような場所に出た。

「待っていたよ。シカリオ。」

シカリオ。

それが今の俺の名。

意味は殺し屋。

「ロンビアか何処かの言葉らしい。」

「。仕事は終わった。」

「ああ、さつき報告があった。斎木達也は無事にあの世へ旅出った
そうだ。」

「次の依頼は??」

「次はこいつを頼む。」

そういつて俺にフラッシュメモリーを投げてきた。

「わかった…。ところで…。あなたは誰だ？それに、この部屋に
漂う死臭はなんだ??」

そついいながら懐から愛銃のM1911ガバメントを取り出す。
もちろんセーフティーは外した状態だ。

「質問が多いな、シカリオ。」

そついいながら目の前の男が銃を構えた、否、構えようとした。
構える前に俺が撃ち殺したからだ。

1発を脳天に、残り2発を腹部に命中させた。

すぐに男に近付き、顔に触れる。ベリツと音とともに、特殊メイク
が落ちる。

そいつのポケットを探ると車のキーが出てきた。それを自分のポケットにしまい、クローゼットを開ける。

中には本物のカンパニーの社長だった死体が無惨に転がっていた。

「……ちくしょう……」

目から一筋の涙がこぼれ落ちる。

涙なんてあの日以来かもしれない。

カンパニー社長の死体。いや、恩師、いがらしりゅうやう五十嵐隆三の死体に向け、合掌する。

そして、ポケットに入っている別荘の鍵を取り出す。

もう一つの死体、名前はわからないが蛇の紋章。あの組織の一員であることは確かなようだ。

社長室のデスクの上にあるパソコンにメモリーカードを入れ、データ破壊プログラムを起動させる。

これは、万が一に備えて前々から用意してあった策だ。

あの組織のことだ、すぐにここにもやってくるだろうと思えばエレベーターで駐車場に向かう。

車のキーのボタンを押し、反応した車を探す。

すると「ピーッ」と反応した一台の車を発見した。

組織の車だろうか？

黒塗りのスポーツカーだ。

車の下や周りを確認し安全を確認した。

車に乗り込みキーを捻る。

カカカカッグオーンッ。

腹に響くような音と共にエンジンが始動した。

そして、クラッチを操作しアクセルを踏み込んだ。

「GT3」とブラックで書かれたその文字がキラリと光りながら、その黒塗りの車は駐車場から国道へと出ていった。

「奴です。今、車に乗っていきました。」

「そうか。あいつとは5年ぶりだな。」

「ですね。まあ、もう逢うことはありませんが。」

「ちがいない。散々、邪魔してくれたんだ。それなりの報いは受け

てもらおう。」

「まあ、最高の棺桶も準備したし問題はないだろう。」

駐車場にある一台の車の中にいた男が携帯で誰かと話していたが、俺はそんなことには気付かなかった。

車は、国道から首都高に入り別荘のある千葉県に向けて疾走していた。た。

背後から組織の車が追いかけているのでオービスを無視しながら首都高を走っていく。

そして、アクアラインに入るトンネル内に入ったところでクラッチを5から6に上げた。

無免許運転だが、五十嵐さんには様々な知識や技能を教わっていたのでこれぐらい当たり前前に出来る。

徐々に

心地好い音と共に170km/hまで上がる。

さらに踏み込み200km/hの壁に差し掛かろうとしていた。

「さすが、PORSCHE 911GT3だな、安定性は最高だな・
」

一人つぶやきながらハンドルを握る。

組織の車は未だ追いかけてきていたので、アクアラインは一気に離すにはうってつけだった。

向こうは4人乗っている上、車の性能もこちらのほうが上だ。それでもベンツのあの独特の「人」マークの誇りは廃れてはいないので追いついてくる。

ついに200km/hの壁をぶち破り海ほたるを超えようとしていた。

俺は、そこで異変に気付いたのだ。

まず、組織の車はバックミラーで確認する限り1台もない。

そして…。

ブレーキが効かない。

先程までは普通に効いていたのにも関わらずだ。

そして、アクセルを離しても減速しない。

その時、携帯の着信音が聞こえた。

すぐに、ドアポケットに入っていたそれを取り出した。

「やあ、少年。久しぶりだな?」

「お前…。」

「5年前は五十嵐だっけ、あいつが助けしてくれたみたいだが今度は終わりだな。」

「・・・」

「まあ、スピード違反はしないようにね。その車は時速150km/hを超えるとブレーキ、効かなくなつてスピードだけ上がり続けるから（笑）」

プー。プー。プー。

「そういうことか…。」

この車が組織の車だつて時点で疑うべきだつたな…。

もうすぐ、アクアラインも終わり、カーブに差し掛かる。

時速200km/hでカーブに差し掛かったらさすがにヤバイつと
いか先程からスピードはどんどんあがり、今は240km/hを
指している。

俺は、最後の足掻きをすることにした。

深呼吸し、ハンドブレーキを一気に引ききつた。

キーッ!!

凄まじいブレーキ音と共に車は横転しながら壁に突っ込んだ。

そこで俺の意識は途絶えた。

「終わりました。坂口さん。」

事故現場の脇を一台の車が通り過ぎてゆく。

幸い、他の車はいなかったので巻き込まれた車はいなかった。

「あのバカ息子はどうでもいいが、ファミリーの者が殺されたのは気に食わんからな…。」

壁にぶち当たり、炎上する車だったもの。

原形は既にわからなくなっている上、中の様子は掴めない。

「ですね。とりあえず奴は死にましたよ。」

「わかった。帰還せよ。」

「はい。」

Episode 1 (後書き)

いかがでしたか、車を使った殺人は証拠が残りにくいそうです。誤字脱字、感想等ありましたらよろしくお願いします^^

武器紹介。

・M1911

1926年からアメリカ軍で70年近く使用されていた小銃。カスタムパーツも豊富で開発されてから約100年経った今でも、ファンが多い。

車紹介

・Ferrari F40

フェラーリが創業40周年に出したモデル。じゃじゃ馬とも言われるくらい扱いにくい車で当時の現役のF1ドライバー達が「雨の日には絶対に乗りたくない」と口をそろえて言った車。最高時速324km/h。

・PORSCHE 911GT3

ポルシェ911シリーズのGT3。最高時速312km/hだが、100km/h加速タイムは4.1秒をマークし優れた加速性能を持つ車。「フェラーリ喰らい(イーター)」と呼ばれるポルシェの底力を感じる車。

Episode 2 (前書き)

今回からは、完全に物語に入ります。
連投になりますが、一応見直しは何度かしたので大丈夫だと思います。

Episode 2

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

「パパは正義の味方なんだよ」

「ホント〜???」

「ホントさ、裕也のために今日もガンバるからな。」

「僕も大きくなったらパパみたいになりたい。」

「そりゃいい。ハハハ。」

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

「裕也。これから父さんは、危険な目にあつかもしれんが、必ず戻って来るからな。」

「父さん。無茶しないでね。」

「これをやるぞ。」

そして、俺の首にロケットのついたネックレスをかけた。

「父さんは正義の味方だからな」

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

自分の家のリビングに土足で立つ男達。

「おい、ガキ。この男から、何か預かってねえか??」

そういいながら父さんを蹴飛ばす。

「裕也。大丈夫だ。安心しなさい。例のデータは本国に送った。」

「嘘ぬかすな!!」

「なら確認してみる。」

「てめえ!!」

チンピラみたいな奴を手で制し、一人の男が立ち塞がる。

「正直に話しもらえませんか??」

「断る。」

「では。」

男の腰のホルスターからデザートイーグルを取り出し、母親を撃つた。否、撃ち殺した。

「あああつ…。」

夥しい量の出血。

俺は散々泣き叫んだ。

「キサマッ!!」

父親が男を睨め付ける。

「チップの場所わかりました。では、仙川さん。さようなら」

「なっ!!」

ダンッ。

胸を撃たれ倒れる父親。

顔がこちらを向いた。

そして口が動いた。

「と・う・さ・ん・は・せ・い・ぎ・の・み・か・た・に・な・り・
た・か…」

そして、瞳孔が開いていった。

「さて、少年。その首のロケット、渡してくれないか。」

「え…」

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

「さあ、そろそろ終わりの時間だ。
俺を囲む男達。」

一人の男が俺に話しかけてきた。

しかし、俺はそれを無視し、目を閉じた。

そして、デザートイーグルが吠えた。

ダンッ。

不思議と痛みを感じなかった。

なぜなら…。

そこにはSPAS12ショットガンを片手で構えた一人の男に俺は抱えられていたからだ。

「何者だ!!!」

しかし、その声はショットガンを持った男の投げた閃光弾で遮られた。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

「俺は、正義の味方を目指した愚か者だ。」

「…。」

「仙川君には申し訳ないことをした。」

「…。」

「いくら謝っても申し訳が立たない。」

「…。」

「君はどうしたい?？」

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

「仙川君が奪ったのは細菌兵器の研究資料だ。あれが使われたら人類は…。」

「父さんは正義の味方??」

「そうかもしれない…。」

「なら、俺もその意志を継ぐ。」

「ダメだ。俺らのやってることは正義じゃない。」

「なぜ??」

「何人も人を殺してるからだ。」

「なら…。」

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

（この子の成長率は化け物だな…。）

「師匠。200発終わりました。」

「次、ショットガンで200発。」

「はい。」

（既に俺のレベルすら…。）

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

「生きるためにはいけないことなどあるのですか?? 師匠。」

「いや...。」

「そうですか。では、依頼を...。」

(この子は殺しに対して恐怖感をなくしているのでは...。)

「お前、学校は行かなくていいのか??」

「俺には必要ありませんから。」

「…。」

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

「裕也と言つ名を捨てた時に誓いました。父さんの意思を引き継ぐ
つて…。」

「『弱気を助け悪を滅す』だったな。」

「はい。復習代行屋は、いいアイデアだったかもしれませぬね。」

「そうだな。だが、本来の目的に戻るときが来たぞ。」

「まさか……。」

「ああ。ついに坂口の息子を見つけた。東京中に薬を売りさばいて莫大な金を儲けているようだ……。」

「やっと見つけた……。」

（いつの間にか随分と大人びてしまったな……。今年、18歳になっただばかりなのに……。）

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

回る。

「ここは……?」

確か、俺は車で壁に突っ込んで…。

自分の格好を確認すると、黒のカッターシャツの上から黒のジャケットを羽織り、黒のジーンズ、首に下げたロケットが付いたネックレス。そして、頭の上に押し上げたサングラス。

いつも通りの格好だ。

ジャケットの隙間から、愛銃のM1911ガバメントを取り出し、周りを警戒する。

一面、真っ白な現実離れた空間。

どこまで続いているのかわからない空間。

試しに、一発撃ってみた。

パンツ。

乾いた独特な音が響いたが、いつまで経っても着弾する様子がない。

「なんだ、この空間は…。」

『境界。そう呼ぶのが正しいのだろう…。』

いつの間にか俺の後ろに一人の老人がいた。

「誰だあんた??」

『神。GOD。創造主。監視者。まあ、世間一般に考えられている神じゃ。』

嘘をいつている様子は無いが…。

「本当のことを言ってくれ。」

銃を自称、神に向ける。

『撃ってみなさい。』

「…。は???」

『その銃で、わしを撃ちなさい。』

「…どうなっても知らないぞ。」

パンツ。

再びこの空間に乾いた音が響く。

しかし…。

「な…。」

俺の撃った弾は神の胸の前で時間が止まったように静止していた。

『信じてもらえたかの??』

「ああ。信じよう。」

『意外とあっさり受け入れた上、落ち着いた奴じゃな。』

「まあな。それで、地獄に落ちるのになんで、閻魔様ではなく神様なんだ??」

『地獄、天国など存在せぬのだが…。まあ良い。お主は此処に呼んだのには訳があったからだ。』

「なんだ??」

銃をホルスターに戻しながら神様の言葉を待つ。

『お主は、正義の味方になりたかったのか??』

「まあな。」

『それは、本心か。』

「正義の味方というか弱きを助け悪を滅すという意味を貫きたかった。」

『ふむ。奴らの言っていたことに間違えはなさそうじゃ。』

「奴ら??？」

『仙川と言う男と五十嵐という男だよ。』

「父さんと師匠??？」

『そうじゃ。彼等はお前が適任と叫びたが間違いなさそうじゃな。』

「適任??？なんの話だ??？」

『まあ、それは追いつ追いつわかるじゃろう。お主には、今まで生活していた世界とは別次元に存在する世界、所謂、異世界に行ってもらいたい。』

「断る。」

『はて?何故じゃ???』

「そんなところに行って何かメリットあるのか??？俺には無いとし

か思えない。」

『魔法とかが存在するファンタジーのような世界じゃぞ??皆、憧れるような...。』

「だから...??別に俺じゃなくてもいいだろう。」

『...。そうか...。では理由を話そう。結論から言うとお主以外には無理じゃ。何故かは簡単な話だ。正義の味方になりたいと思うのは長くとも10歳くらいまでだ。それを過ぎてても正義の味方になりたいと思うやつなど存在しない。お主は確かに、大量の人を殺しただろう。だが、そこに少しは正義があった。もちろん、殺しは神としてはあまり心地好いものではない。』

「ちょっと待て。別にその話と異世界は関係ないだろ。」

『まあ、待て。正義という概念はあやふやじゃが、お主は正義の味方というのは、弱きを助け悪を滅つする意思のことだろ??。』

「そうだが?」

『では、話を戻すぞ。お主は確かに殺しをする。だが、お主を連れていこうとしている異世界は甘い世界じゃない。魔物だつておるし、命の危機さえある。そんな場所に一般人を送り込んで逃げ回る。力を与えれば自分に酔って、豪遊する始末。そんな訳で一般人ではなく、選ばれた者を送る必要があるのじゃ。』

「選ばれたもの？」

『そう。世界を救うことが出来る者。すなわち、臆することなく敵を排除し救えるものを救う。そんなことができる者じゃ。』

「そもそも、なぜ異世界を救う必要があるんだ??」

『世界崩壊の危機じゃ。この世界は精霊王の加護により成り立っているが、近年の魔物の増加と度重なる戦争により精霊の力が弱まりつつある。そこで、精霊の力を取り戻した後。戦争に終止符を打ち、魔物が発生した原因を突き止め、解決してほしいのじゃ。』

「なるほどな。」

『どうじゃ??行ってもらえないか??仙川、五十嵐もお主に行かせて欲しいと頼んでいたのだが。。』

「父さんと師匠が…。これは依頼か？」

『依頼…。まあ、わしからの頼みだし…。そうじゃな依頼じゃ。』

「そうか、報酬は??」

『その世界の永住権と魔力と装備で手を打ってもらえんか??』

「永住権??元の世界には戻れないのか??」

『…。忘れたのか??お主は車で…。』

「…そうだったな。魔力つてのはよくわからないんだが。」

『それは、自分で探さねばならないものだ。』

「まあ、どちらでもいい。最後に装備とは??」

『これじゃ。』

そういつて俺の腕に金の腕輪を巻いた。

「なんだ、これ??」

『向こうに着いてから、魔力を注いでみればわかるだろう。』

「ほとんど謎なんだな…。まあいい。その依頼を受けよう。神からの依頼など初めてだがな。」

『面白い奴じゃ。では、頼んだぞ。』

「依頼は完遂する。」

そして、俺の身体は光に包まれた。

Episode 2 (後書き)

いかがでしたか？

誤字脱字報告、感想等ありましたらよろしく願いします。

武器紹介

・SPAS12

ショットガン。ポンプアクションとしても使えるが、オートマチックとしても使えるのが最大の特徴。ストックを肩で固定する事で、片手撃ちも可能だが反動がすさまじい。弾詰まりする事もあるが「小型の大砲」と称されるだけの威力を持っている。現在は生産が中止され、連射性能と威力の強さからアメリカの一部の州でも制限が掛かっている。

ちなみに・・・

ポンプアクションというのはショットガンの用に1発打った後にカシヤンツと引く動作が必要なものことです。一方、オートマチック言うのは次の弾が自動で装填されるので連射が可能なものことです。

Episode 3 (前書き)

いよいよ、異世界での生活が始まりますw

Episode 3

ッ。

ふわりという浮遊感と共に地面に足が付いた感覚が伝わってきた。

どうやら森の中の空地らしい。

「さて。まずは、装備とやらを確認するか。確か、腕輪に魔力を流すんだっとな。」

…。魔力ってどうやって流すんだ…。

試行錯誤しながら、早1時間。

ふと、目を閉じると今まで無かった力のベクトルのようなもの存在に気がついた。

オレンジ色のようなその流れを腕輪に回す。

すると目の前に一枚の扉というかゲートが現れた。

扉に手を翳すとゲートがウィーンという音と共に開いた。

中には更に扉があるのだがそれぞれに鋼鉄できた扉が付いている。とりあえず1番左の扉を開けてみることにした。

手をかざし扉を開けると・・・。

「なっ！！」

咄嗟に大声を上げてしまった。

なぜなら、中は武器庫になっていたのだ。

しかも、ただの武器庫ではない。とてつもなく広いのだ。

10列ほどある棚に世界各国の銃器が置かれており、その下にマガジンやら弾薬がきれいに入っている。

「おいおい・・・。」

柄にもなくはしゃぎたくなる感覚に襲われた。

とりあえず武器庫から、HK416、M37ソードオフを取り出しマガジンとシエルをジャケットの内ポケットにしまう。

しかし、内ポケットがおかしい。いくらいれても膨れないのだ・・・。

結局、マガジン20本、シエル40発を内ポケットに入れ、右腰にM1911左腰にM37を携帯し、HK416を構える。

「さすが、神様としか言いようがないな…。こんだけあれば戦争なんて・・・。」

そんなことを思いながらズボンのポケットに手をつ突っ込む。すると見覚えの無い小さなノートが入っていた。

中を開くと・・・

『装備の説明 by神』

装備といっても、お主が具体的に何を使っていたのかが判らないんでこの世にある銃器や乗り物はだいたい入れておいた。入れてある空間は亜空間という実際の世界と微妙にずれている空間に入れておいた。

腕輪の魔力を通して亜空間の中はお主の魔力で満たされておるから好きな場所で空間を開くことが出来る。後、最初の一回目は扉を開く作業が必要だがこれからは必要な物を思い浮かべ腕輪に魔力を流せば、その物だけ現れる。

その空間自体に入りたい場合は腕輪の真ん中の宝石を押しながら魔力を流せば入ることも可能じゃ。

わしは直接世界には干渉できないがこの空間には自由に干渉できる。じゃから、必要なものがあればメモでも残しておいてくれ。ちなみにこの空間は大きく分けて4つの空間に分けてある。

武器庫、車庫、機体庫、倉庫じゃ。

- ・武器庫内は、世界各国の銃器。
- ・車庫内は、様々車やバイク。
- ・機体庫の中は戦闘機や軍艦。
- ・倉庫は今のところ空。

まあ、こんなところじゃろう。
依頼の報酬はこれで全部じゃ。

では、後は頼んだ……。

歩きながら神様からの託を読み。半分喜び。半分あきれた。前の世界でも装備に困ったことはあまりないが警沢はいえなかった。それがいまや何でも使えるという。これはやはり嬉しいことだった。

……にしても歩き始めて、早3時間。いつまで経っても森を抜けられない。

ふと周りを見ると近くに切り株があったので座って休むことにした。切り株に座って一息ついて、装備の状態をチェックする。武器は全て新品同然で、メンテナンスもしてあるようだ。

つとそこに一頭の猪が疾走してきた。

大量の砂埃を上げながら突っ込んでくる。

様子を見るために右に大きく避けると俺の脇を通り過ぎていった。

…が、すぐにUターンして戻ってきた。

さっきよりもスピードを上げて……。

距離、役40m。

村まで後300mくらいのところで俺は異変に気がついた。

慣れてはいるが、何度嗅いでも嫌になる。そう…死臭の臭いが漂っている。

そして、村の一部で火の手が上がる。

俺は、村が見下ろせる丘まで移動した。

肉眼でもだいたい確認出来るが、ちゃんと確認したかったのでHK416を背中に背負いあるものを思い浮かべながら腕輪に魔力を流す。

取り出したのは、SR-25だ。

早速、バイポットを立てて、スコープを覗き村の様子を確認する。

どうやら、チンピラみたいな連中が村を30人程で襲ったようだ。

今は、村の人々を村の中央に集め虐殺を行っている。

両手を後ろで縛り、その紐を馬に括りつけ引きずり回したりしている。

胸糞悪い光景だった。

早速、SR-25のマガジンをセットしセーフティーを解除する。

スコープは最新鋭の光学式のもので自動で距離を割り出してくれる。距離512m。高低差を考えながらスコープを調整する。村から上がる煙の様子を見ると風による影響はないようだ。

スコープを覗きながらトリガーを絞る。

パシユツ。
パシユツ。
パシユツ。
パシユツ。

一人の女性に襲い掛かろうとしていた男4人の頭に弾丸をぶち込む。

バタツ。
バタツ。
バタツ。
バタツ。

「あーんっ?…おい、ちょっと来てくれ!!!」

1人の男の声に、チンピラ達が群がってきた。

集まった10人くらいを撃ち殺し、残りは半分となった。

俺はSR-25を武器庫に戻しHK416を構えながら、村に向かって走った。

直ぐに村の入口に到着すると、チンピラ達がこちらを凝視していた。

「なんだ、おめ…。」
ダダダッ。
バタツ。

「敵襲!!!」
ダダダッ。

バタッ。

ダダダッ。ダダダッ。ダダダッ。ダダダッ。ダダダッ。ダダダッ。ダダダッ。ダダダッ。

HK416から弾がどんどん発射され、チンピラ達を蜂の巣にして行く。

弾切れになった時点で、直ぐにHK416を肩に回し、腰からM37ソードオフを抜く。

ダーンッ。

カシャッ。

ダーンッ。

カシャッ。

ショットガン独特のポンプアクションで、排莢を行い。チンピラを穴だらけにする。

残り4人となった、その中にはチンピラ達のリーダーであろう男がいた。

「お前。何様だ？盗賊団、月夜に手出して、ただで帰れると思うなよ??？」

背にかけてたHK416を構え直し、マガジンチェンジする。

「妙な武器使いやがって、お前らやるぞ。」

ダーンッ。

っという音と共に零距离射撃を行った。

夥しい返り血を浴びて、銃はもちろん顔中血だらけになった。

俺はそれを振り払いながらM37をホルスターに戻し、先程確認した縛られている村人の元へ向かう。

道には引きずり殺された男の死体や、散々弄んだ挙げ句殺された女の死体などが道端に転がっている。

そして、村の中心部に集められ、縛られている人達が俺の方をじっと見ている。

ちよつと屈んで足に取り付けてあるナイフを取り出す。

無言のまま、村人の手を縛っている縄を切り、金属製の手錠のようなものは金具を撃ち外してやる。

とりあえず全員の手枷を外した。

人数は約40人程だろう。ほとんど女、子供ばかりだ。

手枷をはずしたにも関わらず、誰もその場を動こうとはしない。

中には泣き出す者までいた。しかし、それは喜びの涙ではなく、絶望の涙だった。

「お願いします。どうか、子供だけは、勘弁してやって下さい…。」

「

一人の女が俺の前で土下座をする。
その様子を他の村人達もガン見する。

「…。」

しかし、それを無視し俺は無言のまま来た道を引き返し、先程殺した盗賊の元に向かう。

盗賊たちのポケットなどを漁り、戦利品を得た。

- ・金貨3枚
- ・銀貨68枚
- ・銅貨112枚
- ・石貨98枚
- ・どこかの地図
- ・きれいな石×7個

使用用途がわからないものが多く、とりあえず使えそうな物を物色した。

そして、それらをコートの中にしまい。

村を出た。否、出ようとした。

「あの…。あなたは月夜のメンバーではないんですか??」

突然、後ろから声がした。

振り返ると先程、土下座していた女性だ。

「そつだが??」

その言葉と共に、女性は泣き崩れてしまった。

同じようにその様子を伺っていた人々もお互い抱き合って泣いていた。

先ほどの涙とは意味合いが変わり、今度は嬉し涙のようだ。

そして、泣き崩れている村民を尻目に俺は今度こそ村を後にした。

Episode 3 (後書き)

いかがでしたか？

誤字脱字、感想等ありましたらよろしく願います。

武器紹介

・HK416

アサルトライフル。5.56mm NATO弾を使用。かの有名なM4カービンをヘツケラーコック社が改造した近代良貨版の銃。厳しい場所での使用を前提に作られているためM4よりも耐久性が高い。しかし、値段が高価なため導入はなかなか上手くいっていない。装弾数30発。

・M37ソードオフ

ショットガン。正式名称はIthaca Model 37。イサカというが日本の銃ではない。ソードオフモデルはストックを切り詰めた形で、コンパクトかつ軽量である。装弾数は4発と寂しいところはありますが、威力はあるため室内戦などで重宝する。

Episode 4 (前書き)

今回はちょっと戦闘シーンがあります^^

俺は、正義の見方に味方になりたかった父さんの意思を継いでいるからと言って、別に『英雄』とか『正義の味方』と周りから褒められたり、ちやほやされることを望んでいるわけではない。

先程の女性の目や周りの様子から察するに、あのまま村にいたら英雄扱いされ、しばらく滞在する必要があるだろう。だが、あの村では神様からの依頼に関する資料や情報は得られないだろうし、大量の時間が存在するわけではない。そんなこともあり俺は村を出た。

村を出た俺は街道に沿って歩いていくことにしたが、10分ほど歩くと分かれ道に出た。

盗賊達から頂いた地図と看板を見比べると、どうやら…

右に行くと商業都市マジリタ。

左に行くと貿易都市ヘルセバ。

となっている。

情報が集まりそうなのは貿易都市なので、そちらへ向かって進むことにした。

街道は徐々に山の中入っていく。地図を確認する限り山を越える必要があるようだ。

縮尺はわからないが距離は、結構ありそうだ。

街道は馬車が通った跡のようなものが付いており、道は整えられている。

徐々に辺りが暗くなってきたので、俺は野宿の準備を始める。

つといても、火を起こし脇に寝るだけなのだ…。

食事は三日くらいなら食べなくても平気だから、今日は我慢することにした。

銃を抱え込むようにして俺は横になった。

（翌日）

倉庫の中にHK416・M37をしまった。

山道で両手がふさがるのは何かと不便なので装備を変更する事にした。

両足の太もも部分に、VZ61スコピオンを装備し、背中にSPAS12ショットガンを背負った。

これは、小学生のころに見たことがある映画でアリスとかいう女性がやっていた格好を真似てみたものだ。

映画では、バイクにも乗っていたはずなのだが山道でバイクはきついのでやめた。

それに、目立つからなおさらだ。

山道。

つと言つても本当に険しい山で、両手を使いながら何とか登つていった。

峠に繋がる道は途中にかけられていた橋が落ちていたため、通ることが出来ず迂回するにはこの道しかなかったのだ。

五十嵐さんの指示の元アメリカの某部隊に2年間いたときに比べればまだ、楽なほうだが一般人にこれはきついかもしれない。

山頂に近づくと霧が濃くなってきた。それにもかまわずどんどん進む。

3時間ほどかけて、なんとか山頂にたどり着いた。

霧が酷く2m先すら見えない。

足元に注意しながら歩いていくとなにやら湖ないしは池が霧の中にあるようだ。

俺は、その湖に近づき指で水に触れ、なめてみる。

特に毒性は無く普通に飲めるようだ。

確認が済んだので、手で水をすくい口に含む。

すると・・・体の疲れが取れたような気がした。

「気のせいか・・・。」そう思いながらも、もう1杯掬った。

飲み干すとやはり疲労が少なくなったの身体が軽くなった。

不思議な水だと思いながら湖の様子を伺う。
とても澄んでいる水にもかかわらず底が見えない。

そのまま、湖の底を覗いているとキラリと光る金色の二つの球体が見えた。

そして、それが徐々に近づいてきた。

ギョツとして、背中に架けておいたSPAS12を手に持つ。

そして大量の泡と共に、何かが飛び出してきた。

そして…霧の中から現れたのは魔物だった…。

3年前

「裕也！…気を抜くな。ここが何処だかわかってんのか！…」

「すみません！…」

「そろそろ弾が切れる。そっちは??？」

「後、12発です！…」

（中東某国）

俺と五十嵐さんは今、日本にいる、ヤクザやマフィアに大麻をはじめとする覚せい剤を売り付けている連中のアジト内部で激しい戦闘を繰り広げている。

「裕也、毎度言っているが、死ぬなよ。」

「はい!!」

「前方に敵!!約20名。グレネードを使う!!」

そういいながら、五十嵐さんはAK47の下に取り付けられているグレネードを発射した。

ポーン。

つと気の抜けるような音の直後、前方にいた敵が吹き飛ばす。

そして、五十嵐さんが前衛、僕が後衛で弾を撒き散らしながらアジト内部に潜入した…。

ダダダダッダダダダッ。

「っち！！裕也、C4の準備を。」

「…セットしました。タイマーは6分30秒です！！」

「了解。脱出するぞ。」

時計のストップウォッチを起動させ五十嵐さんの指示の元、走り出す。

陽動用の仕掛けを2・3個仕掛けながら、来た時とは逆に、敵に気づかれないようにアジトから脱出する。

アジトから抜け出して30秒後、アジト内部が爆発しみるみる建物が倒壊していく。

そこから、脇道に隠して置いたジープに乗り、僕と五十嵐さんはホテルに戻った。

今、俺の目の前にいる魔物。

そう『魔物』だ。

先日見た猪の化け物出はない。

本物の魔物だ。

全長4m程、口からはみ出すようなでかい舌。亀の甲羅のようなものを背負い、頭の部分には山羊のような角が生えている。尻尾からは針のようなものが生えており、毒々しい紫色をしている。

グギイアアアア!!

地球上では、まず聞くことの無い鳴き声だ。

ホルスターからVZ61スコープオンを外し、両手で構える。

そして、そいつはこちらに向かって飛び掛かってきた。

10m程あった距離を一瞬にして詰めてきた魔物は、舌を出しながらこちらに突っ込んでくる。

「…上か!」

少し晴れたが霧がひどいので、気付けなかったようだ?

地面を転がり、なんとか避ける。

ドカツ。

つという着地音が響き、先程自分がいた部分には尻尾の針が突き刺さっていた。

着地で怯んでいる部分には、すかさず弾を撃ち込む。

全弾撃ち尽くしたところで、一発目に命中したようでのたうち回っている。

そして、尻尾がHK416の銃口に当たり吹き飛ばされてしまった。

俺は、一瞬慌てたが、背中からSPAS12を降ろし魔物の尻尾に向かって撃ち込んだ。

ダーンツ。ダーンツ。ダーンツ。

3発の弾が尻尾に当たり、針をすべて折った上、何かに当たったように魔物が呻く。

そして、止めを刺そうとしたが甲羅の中に避難してしまった。

試しに、甲羅に向かって一発撃ち込んでみたが一部かけただけで、あまりダメージはなさそうだ…。

しかし、不用意に甲羅に近づくと飛び掛かってくるかもしれない。

腕輪に触れ、SPAS12を武器庫に戻して違う武器を取り出す。

『バレットM82A2』、それがこの銃の名前だ。

多少、霧も晴れてきたようだ。

様子を見ながら、魔物から100m程下がる。

バイポットを広げ、横たわる。

霧の中でも、巨体の陰は見えるので問題はない。

スコープを覗きながらその瞬間を待つ。

この銃を使うのは2度目だからか、自然と手が汗が湿っていく。

その体勢のまま15分が経過した時、ついに魔物が動いた。

まず。頭がニョッキつと出てきて続いて足、尻尾が出てきた。

そして、魔物が俺の存在に気づいたのかこちらを向いた。その瞬間、トリガーを引ききった。

ズガンッ。

カシャッ。

一発目が舌を貫通し、口の中に命中した。

ズガンッ。

カシャッ。

再び同じ場所に着弾させた。

ズガンッ。

カシャッ。

頭に命中させた。硬い皮膚だが、先程とは違い血が滲んでいる。

グギィアアグギィアア!!

血を吐きながらも魔物が吠えながら立ち上がる。

構わず、先程HK416を当たった腹の部分にありつたけの、弾を撃ち込む。

ズガンッ。

カシャッ。

ズガンッ。

カシャッ。

ズガンッ。

カシャッ。

ズガンッ。

カシャッ。

的が大きいため外すことなく全弾命中し、魔物は後ろに倒れた。

腹の部分はぐじゃぐじゃになり、舌は穴だらけのまま口から大きくはみ出していた。顔は頭の部分はひび割れ程度だが、目からは血と変な液体が溢れていた。

動かなくなつた魔物だが、用心しながら近づく。

心臓を撃ち抜いたのか、当たりには血だらけになっていた。

10m程湖から離れてはいるが血が流れ込んでしまいそうだ。

「さて、どうするか…。」

とりあえず周りの武器を拾いにいきながら、そんなことを考える俺だった。

Episode 4 (後書き)

いかがでしたか？

誤字脱字、感想等あればよろしくお願いします。

武器紹介

・VZ61 スコーピオン

バイオハザード2の映画で登場した武器です。コンパクトで早い連射力を持ちますが威力が弱いのが難点です。32ACP弾を使用し、作品では30連マガジンを使用しています。

・AK47

7.62x39弾を使用した銃で、世界でもっとも知名度の高い銃です。30発の標準的なマガジンを使用し、軍ではもちろんテロリストの象徴的な存在となっています。全バリエーションを合わせると1億丁を超えとも言われています。

・バレットM82A1

装甲車やヘリに損傷を与えられるように作られた大型のスナイパーライフルで12.7x99mm NATO弾の巨大な弾薬を使用する。マガジンも10発と大容量で、イラク戦争の時に1.5km先にいた兵士を両断したのは有名な話だ。ただし、発射音の大きさ、リコイルの強さから立ち撃ちは難しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5082o/>

Sicario ~ 漆黒の殺し屋 ~

2010年10月29日11時55分発行